ポストコロナの2023年世界大会（長崎）に参加して

―原水禁運動の課題、また関連して青年・学生課題を中心に―

赤井純治

いま、ウクライナでの戦争で、核が使われるかもしれない恐れもあります。G7広島で核抑止力を肯定するというとんでもない、岸田政権の姿勢。そしていま大軍拡、9条を持った平和国家日本が崩壊寸前のところまで来ています。世界大会の集約点は3つの基本文書にまとめられています。国際会議宣言、広島デー、長崎の世界大会の文書です。当面の情勢と当座の課題は、ここにありますので、そちらに譲ります。

この中で、核を使わせない、核戦争を防ぐという意味では、世界中で核使用反対、核廃絶を！の声をもっともっともっと強めるしか無い、というのが一言で言っての結論と思います。

本稿では、世界大会の報告と共に、今の情勢・状況に対して、青年・学生の課題で考えているところを書いてみたいと思います。被爆の実相・戦争の実相、を知るということ、もっともっと広めるということがまず原点としてあるべきです。原水爆禁止運動が始まったのは、ビキニ水爆実験で、自然発生的に始まった3000万余の署名です。それによって原水協、被団協ができた。こういうたくさんの声でこそ世の中を動かし得るということを体験してきたわけです。この署名の大運動の提起が今年、再度ありました。早急に500万筆を達成しよう、と。

もう一つは、一人でも世界を動かすことができるということがあります。国民平和大行進、1958年西本敦さんが核廃絶の思いを胸に一人で世界大会が開か

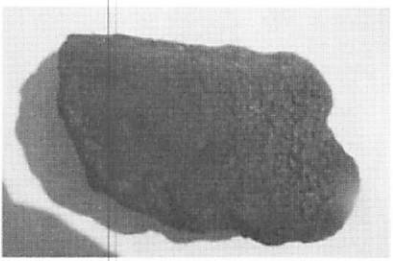
れる東京まで歩き始めたら、ぞろぞろと1万人の行列ができる、新聞報道の中で全国でも百万人が行動するということで、その後は最大千万人以上の行進とも言われてますけれども、今も10万人の行進が続けられているということで、一人の力でも大きく動かしうることを講義で話し、学生も共鳴してくれます。実際、今年講義でそういう話に触発され、世界大会へ行くことを決めた人も出ました。

今、学生層は一般的には、なかなか動きがないんですけれども、やはり若者らしさが眠ってる段階だと思っています。いろんな行動力とか眠っている。それを刺激をするのが平和教育ではないかと私は考えています。

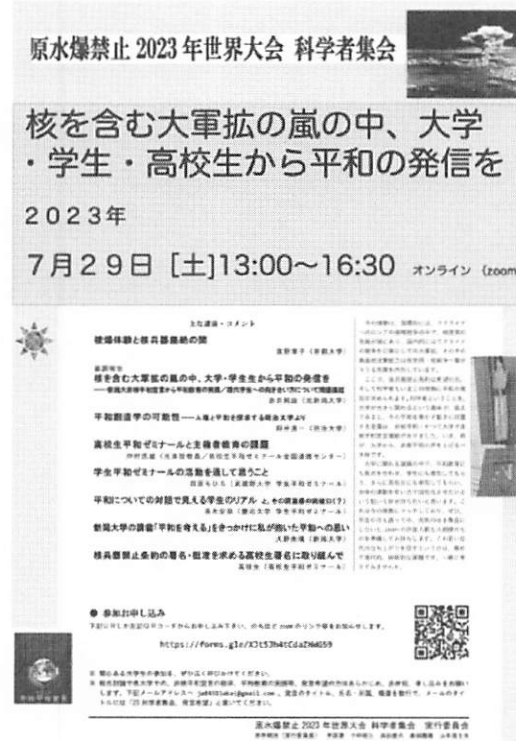
世界大会は、国際会議8月4日より前、原水爆禁止２０２３年世界大会科学者集会がいわば最初です。

そのテーマは〝核を含む大軍拡の嵐の中、大学・学生・高校生から平和の発信を〟となっていて、諸般の事情から私が実行委員長をやることになり実施しました。基調報告ということでも報告しました。

ポストコロナの２０２３年世界大会に、広島国際会議４日、５日、広島デー集会（６日）、長崎世界大会（7、8日）に参加してきました。台風の影響で、9日の閉会総会を前日8日に前倒し、一部圧縮した形での世界大会でした。5日、原水爆禁止世界大会国際会議、9時半開催の前に少し時間があったので、原爆ドームへ。ドームの近くは、蝉の声に満ちています。仏教徒の平和への読経も。原爆投下目標の相生橋、川は満ち潮でしたが　原爆瓦を探してみました。（…これは鉱物採集も仕事の一つの私の習い性となったようなものです）小さな原爆瓦が、見つかりました。78年ぶりに川の下から拾い上げられ日の目を見たものです。8月6日は原水爆禁止世界大会広島デー集会（１５００人）で、私が科学者集会の報告、終わるまで緊張の時間でした。以下がその報告の概要です。



原水爆禁止２０２３年世界大会・科学者集会の報告



科学者会議が中心になって実行委員会を作り、開催し、深い内容の議論ができたかと。7月29日開催、137名の参加者でした。テーマ名にある通り、若者に焦点を合わせ、学生3人高校生1人と大学関係者3人、元高校教員1人、と若い力に比重を置いた初めての企画としての取り組み。今の情勢で、核兵器禁止条約は大きな希望の光です。しかしさらに平和世論を強める必要。これに、学生をはじめ若い世代の立ち上がりを促すのは、インパクトがありますし、今様々な分野の運動、団体、組織に共通な、世代継承の課題にも繋がり、極めて現代的、挑戦的な課題です。そして、今の状況で、対置すべき言葉は、非核平和、これがキーワード。かつて大学での非核平和宣言運動がありました、今再び大学から、学生も含め非核平和の声を上げるべきときです。情勢などの解明・論点も大事ですが、運動の主体の課題に焦点を合わせたいと、平和教育を今回テーマに、学生、高校生にも参加してもらい、若い力で活性化させたいという狙いもありました。講演では、悲惨な被爆体験の原点と被爆者運動の発展、リアルな言葉で被爆の実相が語られたり、大学非核平和宣言から平和教育の実践を30年にわたり行い、現代学生への向き合い方につき問題提起、アクションの大切さ。高校生平和ゼミナールの活動。学生の立場から、学生の意識の変化の要因、沖縄の高校生のアクティブな活動等が紹介されました。最後集会アピールを採択。

今回の8人の講演、全部話が深く繋がっていました。私自身は、準備の中、考えさせられ、学生層が動きに

くい、あまり動きが出てこないのは、なぜかを考え、キーワードはイデオロギー闘争ということではないか、との結論に至りました。これを今まで正面から、捉えていないのではないか？今後、このことをまず真正面から見ての、取り組みがカギになるのでは、とも考えます。つまり、学生を無関心にさせている戦争勢力があるということ、あるいは弁証法の視点です。この時、もう一つ共通のキーワードとして印象に残ったのは「学び・勇気・友情・実践」という４つの言葉でした。

世界大会での企画で、サーロー節子さんの話は大変、迫力ありました。戦後、米国に留学、その時のバッシングと感じたこと、これが彼女の原点になったこと。濃密なお話と時間でした。そのあと、新潟県代表団と合流、原爆資料館を見学。灯籠流し、全員でお好み焼きで夕食。今回、台風の影響で、短縮しての原水爆禁止世界大会となりましたが、いずれの会議も大変濃密な内容でした。

国際会議で、印象に残った話、２つ３つ加えておきます。

・アメリカのジョセフ　ガーソンさんの指摘。広島とホノルルが公園のことで提携したこと、これは大変おかしい、とんでもないことだとの指摘。つまり真珠湾攻撃と広島への原爆投下を両方、同じようなものとして、広島への犯罪を帳消しにするような動きで、おかしい。核は人類への犯罪という重大な危険、これを告発しなければならない。

・韓国の人が原爆投下を国際的な民衆法廷で裁判してゆくことを提案したい、と重要な指摘でした。被害者がいて加害者がいないのはおかしい！と。確かにそうです。

・ロシアのボドロフ氏は原発の危険を原爆と同様に重大、と。

長崎での世界大会、開会総会、分科会で印象に残った２つの話も特記します。

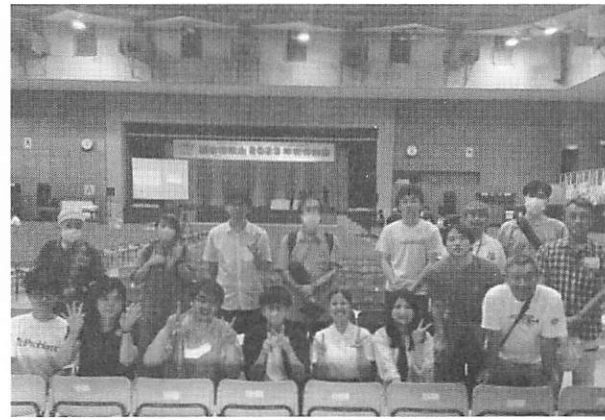
・一人目は被爆者の田中照巳さん、ご自分の被爆の体験を話して、被爆のこの悲惨さ、非人道性、その本当のこと、みんなわかっていないのではないか、わかっていないから声を上げないのだと鋭い指摘でした。本当にそうです。もっと、この悲惨さを、一人ひとりの市民が自分ごととして真正面から捉えるべきです。被爆の実相をもっともっと、知らせてゆくことが重要で

す。新潟ではピースフェスティバル、また新潟平和の波行動をもっと広め、定着させなければと、と思いました。

・もう一人は、憲法学者の小林節さんのお話。今核兵器が人類に対して再び使われるかもしれない危険性が高まっています、この核兵器の非人道性を世界へ発信する責任があること。特に、日本国民には主権者としてすべきことがある。岸田首相の愚かさに反省を求めることができるのは日本国の主権者国民だけです。この危険を取り上げるべき。今年、総選挙があるかもしれない、その最大の争点として核兵器の問題を訴えよう。

核兵器禁止条約の批准を総選挙の争点の一つにする運動を提案する、との発言がありました。確かに、これが政治を変える、政府を変えることになります。いま大軍拡で新しい戦前の状態、平和憲法が危ない、偶然でも核戦争になる危険があります。私も、これから核兵器禁止条約を争点にしてゆこうとの運動を広げようと、改めて思いました。これが秋からの運動への手がかりです。

その後、9／21には常任理事会が東京であり、そこで私から、世界大会その後として、以下を発言・報告しました：SNSグループ（MLメーリングリスト）『反核平和青年 交流ひろば』を立ち上げました。世界大会に今年は多くの青年が参加、またその集いも盛況でした。その学生、青年、高校生たち、またこの核廃絶と平和問題に関心ある青年の参加を呼びかけます、と。これは、世界大会2023年科学者集会有志の学生高校生の四人の講演者と話し合った結果、そういうMLになりました。科学者集会の内容は非常に良かったので、報告集・記録集を、カンパで補填し、



廉価（ワンコイン？）で作り、学生等にも広く普及する予定です。８つの講演が全部結びついて、青年学生問題を考える最新の良い素材にもなると思っています。

そして、ここで講演した学生高校生は全員、世界大会と青年の集いにも参加（元青年の私も参加）。青年の集いを8月限りにせず、また各地の報告会で終わりにするのでなく、継続して、全国の連携を継続、情報を共有、学びの場、経験交流の場として、『反核平和青年 交流ひろば』という名のＳＮＳグループ（ML Mailing List）を、この科学者集会の若者中心の有志で立ち上げることとしました。

各県でも、青年の集いに参加した学生、世界大会に参加してなくても関心ある青年で、この全国的な交流の場に参加したい人は このグループのＭＬ担当の赤井（ja8631akai@gmail.com）までメールで連絡ください、と訴えました。

いま、核兵器が使われる危険が大きくあるなか、また国内では、大軍拡・日本が平和国家を捨てる間際に来ている現在、青年・学生・高校生から何ができるか、の意見交流、経験の交換などの場にもします。今、日本の平和・核廃絶にも一番求められている課題と思います。

南ア、ネルソンマンデラの言葉に

It always seems impossible until it is done.という言葉があります。これを講義他の各所で私は言っています。ことが成されるまでは不可能に見える。でも道理の通ったことは必ず実現する、人はそれが実現してから、当然だったな、と思うということです。でも、裏の意味があって、人々が不可能と思う位ですから、どんなにか大きな困難もあるか、ということも言っています。

私は、核兵器禁止条約ができるということで、これを体験した感じです。要は、この困難をあらかじめ想定の上で頑張れば、必ず理想・願いは実現する、と。若い力とも結びついて、このようにがんばろう、共に平和を実現したい と思います。

（あかいじゅんじ　新潟県原水協代表理事・新潟大学名誉教授）